

1989-24 1/5

橋爪大三郎  
東京工業大学助教授(社会学)

# 野党はもういい、 政権政党が もうひとつ欲しい

今求められる政治の改革。  
その基礎にある選挙制度の改革。  
そのための、  
全く新しい提言。

## 政治は「究極の選択」だ

「究極の選択」ばかりである。「マイク・タイソンに一発殴られるのと、小学生に一日中殴られるのと、どっちがいい？」という、あれである。

そこで、こんな「究極の選択」を用意してみた——。A氏は、どんな金にもすぐ手を出す、清潔とはほど遠い政治家だが、有能な人物。いっぽうB氏は、清潔なことにかけては申し分ないが、お世辞にも有能と言えない。さて、二人のうち一人を選ぶとしたら、あなたはどちらを選びますか。

こういう選択は、できれば願ひ下げにしたいが、ぎりぎりの選択が、ものごとの本質を明らかにするということだ。ある。

最近の論調は、汚職に縁のないクリーンな政治家なら誰でも歓迎、と言わんばかりだった。だが、ちょっと待ってほしい方がいい。いつ反対党が政権をとるかわからないと思えば、政権を取ってもあまり無茶はできない。頭をしぼって、反対党よりましな政策を考えつき、つぎの選挙でも有権者の支持をつなぎとめようとするはずだ。英米流の二大政党制は、そういう歴史の知恵の産物である。「半永久的」な自民党政治は、いくら何でも長すぎる。

ではどうして、政権交替が起こらなかつたのか？

それはいちおう、有権者の選択だと言える。総選挙で、自民党が第二党に転落すれば、いつだって政権が交替していたはずだ。

それに違いないが、そういう選択をしている自覚が、有権者にあつたらうか。そもそも選挙が政権交替のためにあるという発想が、なかったのではないか。日頃のうつぶんを野党に投票して晴らすのが選挙、ではないのである。日本のように代議制民主主義をとる国

5。

ここは断然、A氏を選ぶべきである。いいですか。A氏は有能な政治家だけれど、すぐワイロをとるというのでしよう。それなら、そういうことをしないよう、厳重に監視すればいいのです。そうすれば、結果的に彼を、「清潔で有能な政治家」にすることができ。少なくとも、その可能性ぐらいあるはずだ。それにひきかえ、B氏をいくら厳重に監視したって、有能になってくれるわけじゃない。彼を「清潔で有能な政治家」にするのは無理である。

ゆえに、B氏でなくて、A氏を選ぶのが正しい。政治とは、そういうもの——と、まず腹をくくる。政治家という生き物はみな、A氏のように信用ならない連中なのだ、とまず前提する。猛獣なら、頑丈な鉄の檻に入れるだろう。おとなしそうな飼犬でも、いちおう鎖につないでおく。だから政治家も、ルール違反をしな

いよう、制度の檻にとじこめておかないとだめだ。そういう割り切りが、日本の有権者はこれまで、足りなかったのではなからうか。

政治家によい政治をやらせるのが、制度の目的である。猛獣に芸をやらせるようなものだとすれば、政治がよくない時に、「政治倫理の確立」と百遍唱えるより、制度をうまく手直しするほうがよほど効き目がある。

## 政権交替をどうやって保証するか

さて、政治家は大勢集まって、政党をこしらえている。だから、ひとりひとりの政治家だけでなく、政党を監視し、コントロールする手段も必要である。

その決め手はなんとと言っても、政権交替だ。ひとつの政党が長く政権を担当していれば、どうしても腐敗する。そうでなくても、たるんでくる。適当に交替させた

の、政治の根本は選挙である。選挙で政治家を選びだすのだから、誰を選ぶかから、選挙のやり方そのものだって、選択の対象になっているはずだ。つまり、

有権者→選択↓選挙制度→選挙↓政治家  
のような二段階の選択が、実はある。

選挙にばかり気をとられ、選挙制度の選択をおろそかにしてはいけない。なぜなら、制度(投票の方式)次第で、選挙結果もずいぶんちがってくるからである。

そればかりでない。実は、どういふ政党がいくつできるかも、選挙制度のあり方次第である。政権が交替しなかったことだって、日本のこれまでの選挙制度と関係がある。

結論から先に言うと、政権交替に結びつきやすいのは、小選挙区制である。これはそもそも、有権者の投票行動の小さな振れを増幅して、地滑り的な政権交替

に結びつけるための仕組みなのだ。だから、自民党の政権にあきたらない人は、小選挙区制もまじめに研究したほうがいい。

小選挙区制といえはこれまで、自民党が言い出すものと相場が決まっていた。同じ得票数で、なるべく沢山の議席を占めようという算段である。なるほど、一回目の選挙ではそうなるかもしれない。しかしそれは目先の話で、そのあと必ず、逆に振れる日がやってくる。自民党は、そこまで分かっていたのではないかな。だから社会党が、本気で政権を取る気があれば、これに乗るのも手だった。

### 投票のパラドックス

選挙のやり方にはいろいろあって、どの投票方式をとるかににより、選挙結果が大幅に異なってくる。また、不合理なパラドックスや意外の結果をうむ場合が

多々ある。——こういうことは、一部の専門家には「常識」らしいが、大部分の有権者はそんなこと知らない。幸い、佐伯胖氏(東京大学)が十年ほど前に書いた『「きめ方」の論理』(東京大学出版会)という、極めつきのよい本があるので、少し広い視野から選挙制度を考えたい人はぜひこれを読んでみましょう。

「投票のパラドックス」なるものを最初に発見したのは、二百年も前の、コンドルセというフランス貴族だった。この業績は、長い間ホコリを被っていたが、最近経済学者の注目するところとなり、「社会的選択理論」というものに生まれ変わった。そして、われわれの常識をくつがえす、興味ぶかい結論をいろいろ導いている。

佐伯氏の本からためしに、さしあたり関係ありそうなところを紹介してみよう。

①単記投票方式(一人一票の単純多数決)では、最多得票者(ベスト・ワ

ン)が、実はワースト・ワンでもある場合がある(表1参照)。

平たく言うと、単純多数決の勝者が、他の候補者に比べてすぐれている保証はまったくなく、ということだ。人びとの意見が割れていると、特にそうなる。よりよい国民の代表を選ぼうという選挙が、これでは困る。

単純多数決は、何とも不合理。でもほかによい方法があれば、まだしもだ。たとえば、上位二名の決選投票というのは

表1

有権者	1	:	x	>	y	>	z
"	2	:	x	>	y	>	z
"	3	:	x	>	y	>	z
"	4	:	y	>	z	>	x
"	5	:	y	>	z	>	x
"	6	:	z	>	y	>	x
"	7	:	z	>	y	>	x

x, y, zは選択肢

どうだろう。これなら当選者は、曲がりなりにも過半数の支持をうるわけだ。ところが、

②決戦投票方式にも、単純多数決の場合に輪をかけた不合理がいろいろ出てくる。

ということがわかっている。その他の投票方式にもみな欠点があつて、理想的なものなどないらしい。

結論。選挙制度に決定版はない。だからそれぞれの方式の特徴(欠点と利点)をよく知ったうえで、目的に応じて使いわけていくのが賢明だろう——社会的選択理論の教訓である。

そもそも民主主義の基本は、制度(合法的な手続き)に従うことである。

政治の主人公(主権者)は、国民(すなわち選挙民)である。ゆえに、その意思は絶対。ただし、国民の意思を直接知ることにはできないから、何らかの形で表明してもらおう。それが、選挙だ。ところが選挙結果は、なんと選挙制度のいかん

に左右されるといふのだ。制度がまずければ、「天の声」も「変な声」になってしまう。だから、国民の意思を尊重するため、選挙制度の点検をおこなってはダメなのだ。完璧な制度がありえないのだから、なおさらである。制度を見直すこと(相対視)と、制度に従うこと(絶対視)は、矛盾しない。その微妙な感触がわかったときには、民主主義の上級生だと言ってもよいだろう。

### 選挙制度が政党を作る

ところで現実の選挙制度を考えようとすると、社会的選択理論のあまり扱わない、もっと具体的な問題も頭に入れないといけない。

たとえば戦後、衆議院の選挙はずっと、中選挙区で行われてきた。選挙区ごとに、三ないし五議席を各党の候補が争うやり方だが、これが自民党の派閥や野



党の多党化を生みだしたことは明らかだ。仮にいま小選挙区制になったとしたら、公明党や民社党のような三番手以下の政党が、そのままの形で生き残るかどうかはなほ疑問である。——つまり、選挙制度と選挙の選択肢（候補者や政党）とは切り離して論じられない。選択肢の顔ぶれも、制度次第で変わってしまうのだ。

もうひとつの問題は、マスコミの選挙予測が、投票に影響することである。たとえば、「X候補が当選スレスレ」などと報じられると、かえって投票が集中し、ゆうゆう当選のはずのY候補があげこべに落選、なんていうことがよくある（この前の参院選のように、有権者が我が意を得たりとばかり、ますます予測どおりの結果になる場合もある）。マスコミに選挙予測をするなど言っても無理だから、予測にかき回されたいですむ制度を見つけないだろうか。

してみる。いろいろバラエティーがあるなかで、A・小選挙区制/B・認定投票制、を両極と考えると、うまく整理がつくのではないかと思う（認定投票制は耳慣れないかもしれませんが、すぐあとで説明します）。

### 政治はダブル・キャストで

まず、小選挙区制。これは一議席をめぐる争いだ。有権者の選択は、〈究極の選択〉とそっくりになる。その他大勢の候補はかすんでしまい、事実上、上位二人（二大政党）の一騎打ちになるだろう。ぎりぎりどちらの候補を信任するか、責任ある一票が求められる。

小選挙区制だと死票（議席と結びつかない票）が増える、という批判がある。確かに、半分以上が死票、なんていうことになりそう。有権者の心理として、自分の票は生きてほしい。だが果たして、死票はそんなに避けるべきものなのか？

選挙が成功するには、落選する候補も必要である。それも、当選者に遜色ない候補がすれすれで落選することが望ましい。それでこそ、有権者の選択が中身の濃いものになる。逆に言うと、死票がほとんどないようでは、不毛の選択で、選挙として失敗だと言わなければならぬ。小選挙区の哲学によると、死票こそ価値あるものなのである。

中選挙区では各党とも、当選を狙って、候補者をしぼってくるから、五党から四名を選ぶ（一名しか落選しない）なんていう、激戦だけれど内容の乏しい選挙になりがちだ。これに対して小選挙区制は、最低限、二人に一人の選択を確保する。つまり、議席の少なくとも二倍の政治家を、常時プールしておかねばならない。これは無駄なようだが、必要なコストなのだ。

小選挙区制はもとも、政治をダブル・キャストで運営しようという、大変贅沢な発想である。質の高いサービス（政

治）を求めるなら、有権者もそれなりのコストを負担しなければいけない。

コストには、二種類あるだろう。ひとつは、落選した候補にも、歳費みたいなものをちゃんと支給すること。金額は、得票にもとづいて計算すればいいだろう。もうひとつは、落選した（次点）候補にも、当選者に劣らない名誉と、選挙区での活躍のチャンスを与えること（たとえば、現職議員との公開討論会とか、国政調査権とか）。それが「死票」を活かすこと、つまり相対少数意見を、いつでも多数意見にとって代われる状態にしておくこと（社会的な安全装置）でもある。投票も大切だが、次の選挙を不毛の選択にしないためには、投票のあとの手当てもおろそかにできないのである。

### 中選挙区なら認定投票を

さて、小選挙区制で厄介なのは、地域割りだろう。現職議員が騒いで、蜂の巣

をつついたような騒ぎになる。地域割りができるなければお流れ。さもなければ、いまの中選挙区をそのまま定数一にしてしまおうしかない。

これがあまり乱暴だと言うなら、いまの区割りを活かして、もっと別な制度を工夫できないか？——できないことはない。それが認定投票制だ。

認定投票（approval voting）は、一人一票でなくて、複数の候補に投票できるという方式。三名なら三名まで、好きな候補に投票できる。得票の多い順に定数まで当選となるのは同じだ。要するに、いまの選挙区も定数そのまま、一人（例えば）二票にするだけだから、明日からでもすぐ採用できる。

「認定投票」を提唱したのは、ブラムス、フィッシュバーンという二人の学者である。彼らはこの方式に、二つの利点があることを証明した。第一に、普通の投票だと、他の有権者の動向を考慮してからでない、どの候補者に投票したら

最善か決まらないのだが、この方式ならそれは関係ない。つまり、投票行動が選挙予測のたぐいに影響されない。第二に、似通った候補の共倒れを防ぐことができる。しかもこうした利点は、他の方式にないものだという。

認定投票制は、さっきの小選挙区制と対照的である。小選挙区制が〈究極の選択〉だったとすれば、これはその逆に、あれもこれもという選択。具体的に考えてみれば、その意味がわかりやすい。

中選挙区制で選挙に勝つには、一選挙区で二議席、三議席を獲得しないとだめである。だから自民党は、派閥単位で選挙を戦ってきた。社会党は、次の総選挙に百八十人の候補を立てようとしたのはよいけれど、現職がごてたり地域割りでもめたり、同士討ちがネックになっている。それもこれも、一人に一票しかないせいだ。

認定投票制ならこれが一挙に解決。社会党だって、定数いっぱい候補を立てら

れる。社公民の連合を組みなければ、それも簡単だ。小選挙区制に比べると、少数政党の議席も確保されやすい。新しい政党を育て、政権交替をなめらかに進めるという点で、一人一票の現行中選挙区制より、ずっとすぐれたやり方だと言えよう。

候補者のなかから、一定の資質(良識)ある集団を選びだすが、認定投票の本来の機能である。当選するには、単記の場合に比べてかなり高い得票率が必要だから、不支持が一定の割合をこえらると当選できない。醜聞議員や灰色議員は、あっさり落選してしまおう。複数候補に投票できるといことは、その他の候補にマイナス票(不適格の判定)を投じると同じだからだ。ただしこれは、この制度の少々危険な点でもある。この制度では、劇的な政権交替が起りにくいかわりに、政党が互いに似通ったものになってくる。選挙協力や政策協調もやりやすくなる。他党を攻撃するよ

り、自党に対する有権者の信頼を獲得するほうが大切になるからだ。

一人一票でない、変則的なこの投票方式は、これまであまり論じられたことがないみたいだが、研究してみる値打ちがありそうだ。特に、政治家が清潔でない和我慢できないのなら、これこそうってつけの方式だと言えよう。

ついでに比例代表制の話もしておこう。この方式の利点とされるのは、党派別の得票率がかなり厳密に議席数に反映することである。しかし、候補者の名簿順を、有権者の手の届かないところで決めてしまうのは(拘束名簿式)、問題ではないだろうか。議員と有権者の結びつきも稀薄になりがちだ。

というわけで、小選挙区制にしろ、認定投票にしろ、その他の方式にしろ、われわれの選択の余地は大きいのである。もっと詳しい議論を、ぜひ専門家に詰めてもらいたいものだ。それでも、どういう選挙制度がよいの

か、最後に選択するのは有権者である。どれを選ぶかで、どういう政党がいくつはいけない。小選挙区制・イコール・反対、の条件反射ではもう困るのだ。

衆議院の定数不均衡是正、それに、参議院改革には、どうしても近々手をつけたいといけない。それならついでに、投票方式も見直すべきだろう。特に、参議院が本来の機能を發揮するために、衆議院の投票方式を別々のものにしておくことが、ぜひとも大切である。衆議院は小選挙区制、参議院は全国区の認定投票制、という組み合わせはどうだろう。

### 自民党が惨敗すればすむのか

都議選に引き続き、七月二十三日の参院選でも、自民党は予想通りの大敗を喫した。リクルート・消費税・芸者スキヤンダルのトリプルパンチ、など敗因はいろいろに分析されているけれど、底流

で、戦後政治の枠組みがゆらぎつつあることを、有権者も気が始めている。

参院選で社会党に流れこんだ票は、避難票(自民党の議席を減らすための票)とでも言うべきものだった。政権党としての自民党に投ずるわけにはいかなかったが、さりとて、社会党が政権をとればいいと思っているわけでもない。参議院は政権交替に結びつかないという気安さも手伝って、水が低きに流れるかのように票が集まった。

それを自民党は、手をこまねいて見ていた。どういいうわけで何も手を打たな

ったのか、不思議と言えば不思議である。どうしようもなく、あきらめたという説もある。が、「ガス抜き」のタイミングを計算したのではないか、という気もする。国民はいちど、自民党をやと

言うほど痛い目にあわせないと収まりそうにない。しかし、総選挙での過半数割れは、なんとか避けたい。それならいっそ、参院選でこっぴどく叩かれておくれうがよい——そう、判断したのではないだろうか。

たしかに、参院選で社会党に票を投じた有権者が、次の総選挙でもう一度社会

## 報道特別広告。

フジテレビのニュースは、

- ① おもしろい
- ② わかりやすい
- ③ ためになる。



太郎がいる。太郎に聞け。



月 金 11:45 ~ 0:30 キヤスター 木村太郎 松尾紀子  
FNNニュースライオン  
土 0:00 ~ 0:15 日 11:30 ~ 11:45 キヤスター 山中秀樹



# ジョーク・ボックス

選択するはずだ。

これまで「浮動票」(選挙のたびごとに候補者選択)は、一段低く見られてきた。また、投票所に足を運ばない「無関心」層も、都市部を中心に増えていた。それらも吸収して、社会党の得票はほぼ倍増した。声高に保革逆転が叫ばれてもいないこの時期、有権者の票はひと足先に、本来なら代わって政権を担当すると思われる党に流れこんだのである。このような力学が戦後四十年以上経って、ようやく働くようになった。このエネルギーにうまく形を与えれば、政権交替も夢ではない。

## 社会党は、政権党に脱皮できるか

だから問題は、もうひとつの政権党がいつ、どうやって姿を現すか、なのだ。とりあえず、社会党がこの勢いに乗じて、政権党に脱皮できるのかどうか。もちろん、社会党の今後の努力次第だが、それこそ前途多難と言わなければならない。

いま国民の求める政権党の要件は、三つある。①党内民主主義の確立。②財政

基盤と政治資金のルールの確立。そして、③政策の立案・実行能力。①は、党の人事や立候補者の選び方、政策の決めに際して、黨員(有権者)の意思を公平かつ公正に集約するメカニズムを政党がつくりあげていること。②は、大勢の有権者(支持者)から、必要で十分な資金が政治家・政党に渡るルートとその公正なルールが出来あがっていること。①と②がうまくいけば、人材も集まるし、政策立案のためのスタッフも抱えられる。③の基盤は、①、②である。

社会党はこれまで、この方面(いわゆる足腰)が弱くて苦しんできた。しかし、自民党もいまこの基準をクリアできないでまごまごしているわけだし、他の野党もそれぞれ深刻な問題を抱えている。それほど既成の政党は、国民の日常感覚からかけ離れたものになっているわけだ。(1)社会党が生まれ変わるか、(2)自民党が二つに分かれるか、(3)第三の勢力

を出現させるか。どれも大変だが、そのどれかをやるしかない。

その道が遠いとはいえず、何を目標せばよいのか、かなりはつきりしてきたのが前回の参院選だと思ふ。保守vs革新、といった対立の図式はまったく現実味を喪ってしまった。社会は相変わらず矛盾だらけだが、多様で分散していて、とてもそんな対立軸で掬いきれない。自民党と社会党じゃなくて、よく似た政権党が二つあってほしい。課題に即応する機動性、時代の流れを読む先見性、声にならない苦悩もキャッチする感受性を、競いあってほしい。考え方の幅は、それぞれの党のなかにあればいいじゃないか——。

有権者が望んでいる、まだ声にならない暗黙の部分、具体的な政治制度、とくに選挙制度の改革として実現する。それを考える時期にきた。適切な選挙制度は、もうひとつの政権党を育てる、最良の揺りかごである。首尾よくここを切り抜けて、「政治は三流」の汚名を遠からず、返上しようではないか。

## オナラで円相場を上げた男

ドルにたいして円が上がる日本が強くなったと信じるのは、日本人だけの愛国的錯覚であることが多い。たいていはドイツ・マルクも連動して上がっている。最近の乱高下の相場のなかで、マルクにたいして円がジリジリ安くなっているのは、日本の政治不安定のせいだ。

首相がピンクでも私は怒らない。しかしピンクのせいでガソリン代までが高くなるのは困る。責任を自覚すべきである。円相場を上げるにも複雑な要因がからむが、オナラで円相場をあげた首相がいる。実話である。

浜口雄幸(おさち、通称ゆうこう、あだ名はライオン首相)は昭和五年(一九三〇年)十一月十四日、東京駅で右翼の凶漢にピストルで撃たれた。弾は小腸七カ所を傷つけて骨盤で止まっていたが、幸い大血管をそれていた。東大の塩田広重教授が四〇〇ccの輸血をして手術したというので、輸血という新しい医療技術が有名になった。

彼の経過に国民の関心が集中していた十七日、容態好転のしるしである「ガス一発」が放たれた。病室は夜が明けたような晴れやかさ。主治医の真鍋嘉

一郎教授が「秋の夜や天下に響く屁一つ」という俳句をひねりだしたほどである。

十一月二十日、大阪毎日に「首相の屁ひとつ円為替を煽る」という記事がある。上海の円相場が暴騰したというのである。「売りにかかって形勢観望中の支那人が浜口首相の経過良好を知り、引き締めた結果による」と説明されている。

浜口首相は世界恐慌の後の財政立て直しのために緊縮財政を徹底して行っていた。円相場が上がったのは、浜口の緊縮政策が横行され、効果を上げると言う読みが生まれたからだろう。

浜口は、カタブツで通っていた。同年二月二日の長崎日日に「ライオン首相にこの艶聞とは」という記事がある。築地の新喜楽で憲政会の幹部連の会合があったとき、席中随一の美妓が首相の膝にすがって「あなた助けて頂戴よ」と言ったまま離れようとしな。首相は「これは大変だ」と繰り返すだけ。満鉄総裁の仙石が芸者の手を取って離してやった。あとでこの件をスッパ抜かれると、浜口は顔面神経一つ動かさず「はいよく覚えて居ります」と言って爆笑を買ったという。

オナラで円相場を上げた首相は国民的な期待と信頼の中心にあった。(加藤尚武)